

環境教育プログラムの開発に関する実践的研究	
題目	環境教育の現状に関する調査および子ども自身が活用できる行動科学ツールの検討
著者	田村駿也 高瀬和也 塩田真吾 小野田弘士

### 1. 概要

環境問題の解決に向けた対策の一つに環境教育が挙げられている。しかし、環境教育の問題として、①環境問題について考える学習の不十分さ、②環境問題への意識や知識と行動が不一致している点が指摘されている。そこで、(1)先行実践や教員への調査によって環境教育の現状と課題を明らかにし、(2)子どもが環境配慮行動の阻害要因に着目し、その解決に向けて主体的に行動することを目的とした環境教育方法を検討した。特に、(2)について、昨年度は子ども自身が他者の行動変容を目的として活用できる行動科学ツールの検討を行った。

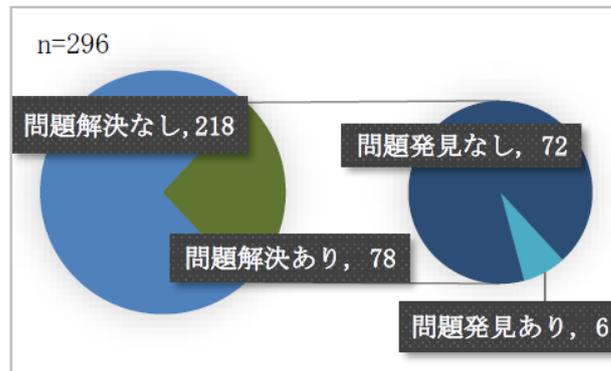


図1 先行実践事例の分類

### 2. 2021年度の研究成果

#### (1)先行実践・教員への調査

まず、環境学習や問題解決学習の実態を明らかにすべく、国立教育政策研究所の指導資料や各都道府県発行の指導資料に記載されている実践事例を対象として、先行実践調査を行った(図1)。また、環境教育や問題解決学習に対する教員の意識を明らかにすべく、小・中学校教員を対象としたアンケート調査を行った(図2)。

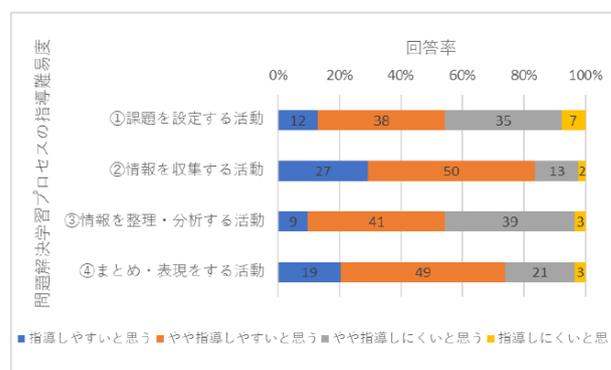


図2 教員の意識(学習過程ごとの指導容易度)

#### (2)行動科学ツールの検討

先行研究をもとに、子ども自身が活用できる行動科学ツールを検討した。行動科学は主にナッジを軸に検討し(図3)、環境配慮行動の促進のため、行動者タイプ・阻害要因別に施策を検討できるツールを作成した(図4)。今後は作成した行動科学ツールを用いて、小中学生を対象に授業実践を行う。

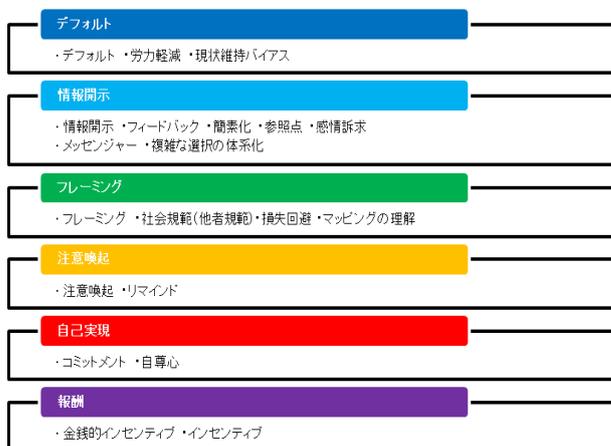


図3 ナッジカテゴリの6分類

### 3. 得られた知見と課題

#### (1)調査結果

- 先行実践事例の分析では、環境学習全体における問題解決的な学習の割合が少なく、その中でも問題発見や問題分析などの「課題設定プロセス」が取り入れられている事例は極端に少ないことが明らかとなった。
- 教員の意識分析では、上述の課題設定プロセスについて、教員は指導難度が高いと認識している結果が示された。
- 今後は、子どもがアイデアを考える課題をどのように設定するか、という視点に着目し、教員が指導しやすい学習支援ツールの開発が急務となる。

#### (2)行動科学ツールの期待効果と課題

- 行動者タイプ・阻害要因別に行動科学を援用できる点で、各人に合わせた施策を検討できるため他者の行動変容の促進が見込める。
- 行動科学の中でも特にナッジに着目したが、仕掛学など他の行動科学との関連についても検討する必要がある。

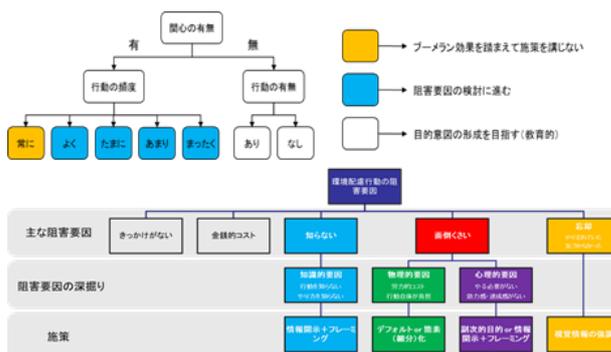


図4 行動者タイプ・阻害要因の選定イメージ